

校長だより

平成23年1月20日(木)

沖縄県立読谷高等学校

校長 與那覇 健勇

～ 読書と私(梅檀発刊に寄せて)～

私は、読書が嫌いであった。他人が創作したり、体験したりしたものを読んでなにが面白いんだろう。疑似体験することなんて、バカバカしい。時間の無駄であると思っていた。ましてや、『趣味は読書です』という人はどうしようもない人間だと思っていた。

鈴木健二は1983～85年までNHK紅白歌合戦の白組の司会を務めた程の人気アナウンサーである。彼は「気配りのすすめ」という本の著者でもあり、ベストセラー作家としても活躍した。「男は20代になにをなすべきか」という本の中で彼は読書の効用についてこう書いている。『行動力でカバーできる30代までは読書をした人としなかった人では差はでない。しかし、40代以降になるとその差が歴然としてくる。だから読書は大切なのだ。是非20代までに読書の習慣をつけてもらいたい。・・・』

私が読書をするようになったのはその本に出会ってからである。まさに目からウロコであった。今ではひと月に4～5冊は読む。気に入ったフレーズや言い回しを手帳に書いている。それらをたまに読み返すと、実にいい言葉だなとか、なるほど、そうだよなあとか共感できる。考え方に幅ができ、人生が豊かになる。挨拶にも使えたりする。なによりも自分の文章力が高まる。いいことづくめだ。

そこで皆さんに言いたい。高校を卒業するまでに本を読む癖をつけてほしい。県外では電車の中で大人や学生が無心に本を読んでいる光景に出くわす。沖縄ではそんなことはない。だから語彙力に差が出るのだ。沖縄の学生は何を聞かれてもその答えは「フツウ」とか「ビミョウ」。それでだけで済ませてはいけない。本県が読書量ナンバーワンの県になったとき、学力問題に終止符が打たれているであろう。だからみんな、今日から本気で読もう。読みまくろう。

今年度も「梅檀」第26号が発刊されることをうれしく思う。発刊に向けてご尽力された方々にお礼を言いたい。ここに掲載されたすべての作品はみんなの宝です。折にふれて読み返して見直してほしい。そして命の息吹を感じ取ってほしい。自分らしく生きるエネルギーの源として。